

宮崎館遺跡等範囲確認調査概報

1987. 3

諫早市教育委員会

発刊のことば

日本で潮の干満の差が最も大きい有明海。

この有明海の西方に位置している諫早湾。

その諫早湾の湾奥部3,550haを潮受け堤防で締切り、その中を内部堤防で囲み、1,650haの干拓地を造成する「諫早湾防災総合干拓事業」の計画が、現在進行中です。

この諫早湾防災総合干拓事業にさかのぼること一千有余年。諫早東部の潟地に条里の制が施行されたと考えられ、今に坪敷詔名が残っています。

先人のたゆまぬ努力と、ひたむきな情熱が広大な耕地を作り出し、諫早を支える基礎になりました。

干拓地に立つとき、広汎と広がる「青い泥土」に挑んだ先人たちの勇気と気魄を感じることができます。

私たちの先達が、この泥土をいつ頃、どのようにして耕地としたか、解決しなければならない課題は山積しておりますが、これらの縦糸・横糸をほぐすことによって諫早の原像が浮び上がってくると思っております。

宮崎館遺跡等範囲確認調査は3か年の計画で実施する予定ですが、ここに初年度の概報を刊行できますことを喜んでおります。

本冊子が文化財保護の一助ともなれば望外の喜びであります。

最後になりましたが、本事業実施に際しご指導いただきました、文化庁、県教育委員会及び関係町内会長、更に調査にあたり深いご理解とご快諾賜わりました地権者各位、嚴寒の中作業に従事していただいた皆様に対し厚くお礼申し上げ、発刊のことばといたします。

昭和62年3月31日

諫早市教育長 西原 英彦

例　　言

1. 本書は、昭和61年度より3か年事業として実施する「宮崎館遺跡等範囲確認調査」に係る初年度概報である。
2. 事業実施にあたっては、国・県の補助金を受けて、諫早市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査にあたっては、文化庁、県教育委員会、関係町内会等関係機関から多くの指導、助言を賜わった。
4. 出土遺物等については、諫早市教育委員会が諫早市郷土館において、公開・保存している。
5. 地形測量、造構の実測、写真撮影、及び本書掲載の図面等に関しては秀島・橋本・川内が行った。
6. 本書に使用した高度値は海拔高であり、方位は磁北を示している。
7. 本書の執筆は第IV章を山本愛三先生の玉稿を掲載し、他は秀島が行った。
8. 本書の纏集は秀島が行った。

本 文 目 次

発刊のことば	
例言	
I 調査にいたる経緯	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の概要	6
1. 調査の経過	6
2. 調査の状況	8
3. 出土遺物	12
IV 長崎県・諫早・宮崎館遺跡等の貝類から見た考察	14
1. 序	14
2. 本遺跡の概況	14
3. 本貝層の意義	14
4. 貝層形成年代の推定	16
V まとめ	17

挿 図 目 次

第1図 諫早市位置図	3
第2図 遺跡分布図	4
第3図 条里の界線	7
第4図 調査地区字図	7
第5図 小野地区トレンチ配置図	9
第6図 川内町地区トレンチ配置図	10
第7図 丸木舟実測図	11
第8図 出土遺物	13
第9図 諫早・宮崎館遺跡等位置図	14
第10図 諫早・宮崎館遺跡等周辺図	14
第11図 発掘位置図	15
第12図 発掘柱状図	16

表 目 次

第1表 遺跡地名表.....	5
第2表 貝類組成表.....	15

図 版 目 次

- 1 小野平野の全景（金比羅山より北を望む）
- 2-1 T-2・3 丸木舟調査状況
- 2 T-2・3 丸木舟検出状況
- 3 T-2・3 丸木舟埋没土層状況
- 3-1 T-9 しがらみ様遺構（西より）
- 2 T-9 しがらみ様遺構（東より）
- 3 T-9 土層堆積状況（西壁）
- 4-1 T-8 遺物出土状況
- 2 T-8 鳥骨出土状況
- 3 T-10 遺物出土状況

付 図 目 次

トレンチ土層図

I 調査にいたる経緯

南北に細長い長崎県の県南域ほぼ中央に位置する本市は、東に島原半島、南に長崎半島と接する地峡に存在する。

本市の面積は、146.8km²を有し、うち12km²ほどが干拓地を活用した古代からの耕地、或いは干拓地であり、市域の1割弱である。昭和58年度版『諫早市統計書』によれば、市の田圃の総面積は21.25km²であり、このうち干拓地12km²で5割強が人工の耕地である。つまり、人工の耕地=干拓地を地図上から仮りに抹消するとすれば、山と海という長崎県通有の地形を呈するようになる。自然の干拓化を発見し、耕地化しようとした先人の智慧には驚嘆すべきものがある。

この干拓地に關し、歴史地理学の分野から研究をされたのが土肥利男氏である⁴¹。氏は第4回に示すように坪敷調名が残存し、かつ、千鳥式に配されていること、及び中世文書等による検証などを経て、小野地区に条里遺構が存在することを指摘された。

降って昭和42年、小野地区の字「横田」、「石橋」以東において田圃の整備が実施された。その折、字「横田」と「西土井下」に挟まれた小排水路「ウマンデー川」が浚渫されることとなり、掘り下げに際して丸木舟が発見された。丸木舟は主軸を北北東—南南西にとり、ほぼ水平位に埋没しており、川幅部分のみを切り取って保存されることになった。この保存されていた断片は、昭和60年度に至って諫早市郷土館へ寄贈されることとなり、我々の注意を喚起するところとなった。

そこで、市教育委員会は昭和61年度より3か年で事業を実施する計画を立て、国庫・県費補助事業として実施したい旨の計画書を提出することとした。

その結果、昭和61年7月補助事業の決定通知を得て、同年実施することになったのである。

本年度実施の調査関係者は次のとおりである。

西原英麿 講早市教育委員会教育長

松尾誠 ノ 教育次長

山本正毅 ノ 社会教育課長

立川勝 ノ 課長補佐

前田龍三 ノ 主任

中島輝昭 ノ 事務職員

平古場豊 ノ 事務職員

木下京子 ノ 事務職員

秀島貞康 ノ 事務職員 調査担当

調査に際し、ご指導、ご協力を賜わった調査員は次のとおりである。

古賀力 講早市文化財保護審議会委員

山本愛三 長崎県立野母崎高等学校

久村貞男 佐世保市博物館鳥嶋美術センター

橋本幸男

調査外業・内業に従事して頂いた方々は次のとおりである。

荒木貞夫、織方堪八郎、川島七郎、川島義之、立川助一、立川秀之、田潤一実、徳永茂人、鳥山利、柄本雪義、東好太郎、真崎保、道辻固昭、道辻豊嘉、道辻正也、山崎繁一、鐵田和子発掘調査及び整理作業に際し次の方々及び関係機関にご指導を賜わった。ご芳名を記し、深甚の敬意を表するものである。(敬称略、五十音順)

諫早市郷土館(野中泰、山口八郎、村井ミヨ子)、諫早市立小野公民館(田中司郎、小川弘、池田由紀子)、稲田三千人、川内知子、久家倉市、久布白領助、古賀佐徳、嶋田繁美、下川達輔、田島政喜、西山岩喜、橋本シズ子、福井里史、藤山武美、藤山丈夫、真崎竹行、松原良一、宮崎正隆、山崎繁育

II 遺跡の立地と環境

標高247mを測る金比羅岳より北方に延びる丘陵は、漸次その高度を遞減し、標高50m付近で傾斜角を変え、緩傾斜面を形成するようになる。近傍には、小野古墳、小野城跡等の弥生時代～中世にかけての遺物が発見され、附近一帯が生活跡あるいは墓地として利用されたことを物語っている。特に字名として「館」、「館」が残存しており、小野城に係る城主の居館跡等が存在することが十分推察される。

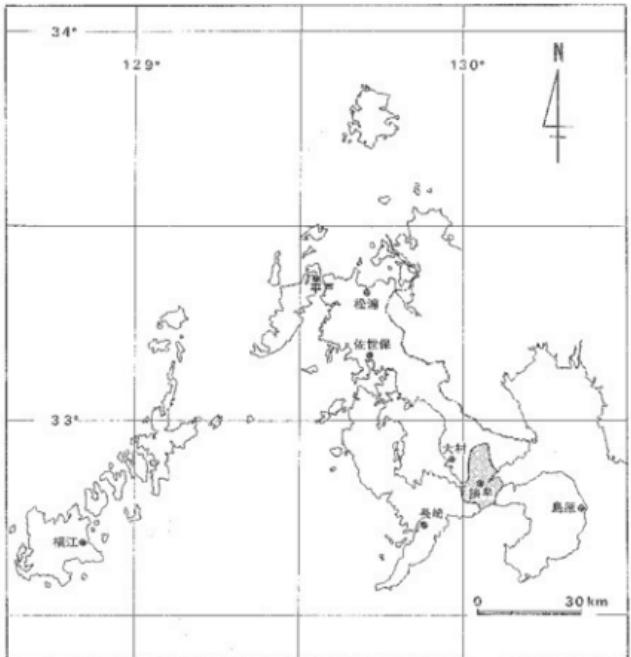
今回の標題である「宮崎館遺跡等」とは、周知の埋蔵文化財包蔵地である「宮崎館」遺跡と、周知化されていなかった条里遺構に対して「等」を附したものである。よって、将来その範囲を確認した後、正式な遺跡名を附すべきであると考えられる。

宮崎館遺跡等は、諫早から島原へ通ずる国道57号の南北に広がっており、北側は現在殆んどが水田として利用されている。標高は低く、4m前後を測るにすぎない。第4図の字「四ノ坪」西南隅に条里の南北の界線を当て、方眼によって条里の存在を推定すれば、東限の南北線が北側においてズレ込んでいる。これは土肥氏が水利の関係で指摘されている²²ように、同一等高線が偏った結果と見られる。つまり、全体的な地形としては「四ノ坪」「森ノ木」あたりが高く、東、北、西側にその高度が遞減していることを指摘することができる。国道以南では、前述同様「四ノ坪」西南隅のポイントから南北線を推定すれば、約3°西に振った南北線が存在する。「瀬六」「道井手」西側の水路で、これが「宗方神社文書」文永元年²³の中分線であろうと推される。現在も東側は宗方町、西側は長野町の地境となっており、当該地が文永元年以前に耕地として存在していたことが推定されるのである。

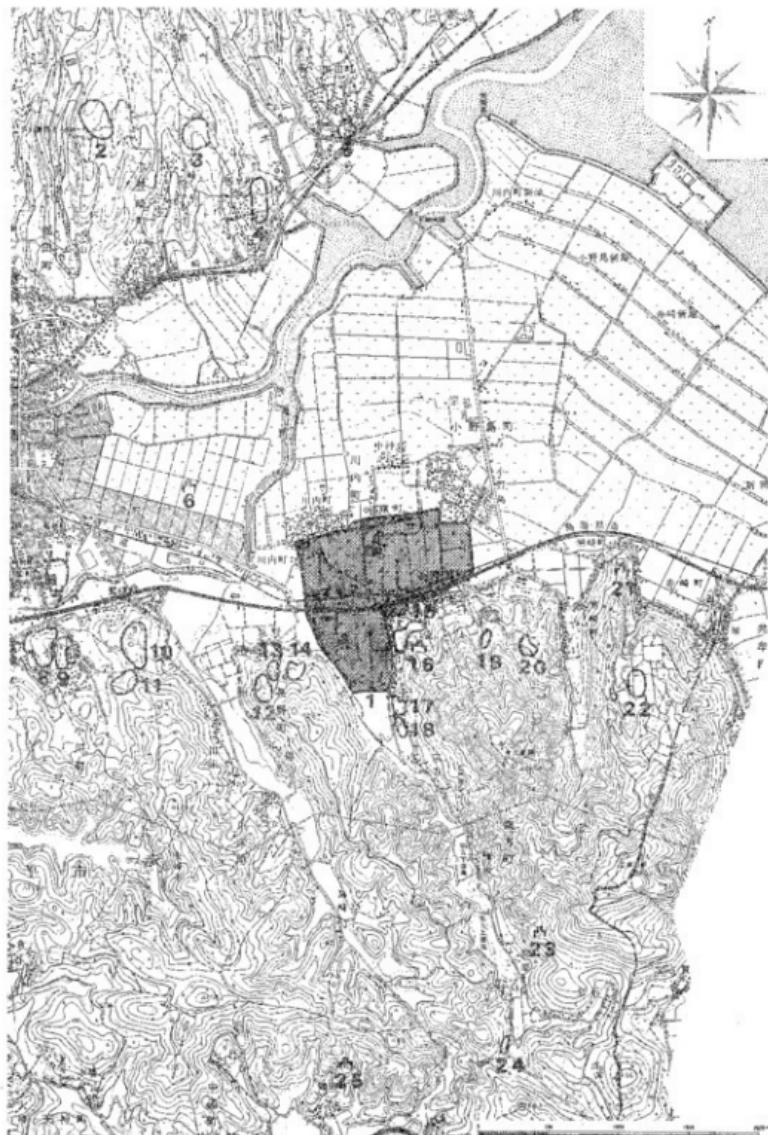
現在のところ、条里の存在を国道57号を挟んだ南北の地域に推定しているが、より広範囲に存在することが十分に考えられるため、巨視的な観点から諫早平野を見る必要が指摘されるのである。

また、宮崎館遺跡からは、弥生時代中期以降の土器片が多く発掘されており⁴、更に甕棺墓、石棺墓、横穴式石室等も見られ、迷錦とした遺跡の利用が考えられる。これら遺跡の在り方を考えた時、時代ごとの生活基盤を奈辺に推定し得るかが問題として浮んでくる。

「林ノ辻遺跡」調査⁵時、想定される水田面を地図上に落とした経緯がある。和島誠一氏らの成果⁶によれば、より低位に可耕地を想定することも可能となってくる。本遺跡を含め、林ノ辻遺跡や、諫早農業高等学校遺跡を成立させ得た生活基盤の存在は、各遺跡の周縁部にあると考えられる。



第1図 謞早市位置図



第2図 遺跡分布図

第1表 遺跡地名表

遺跡名	所 在 地	立 地	山 土 遺 物 等	時 期
1 条毛指定地	譲早市小野町・川内町 宗方町・長野町	水田部	弥生～上師器等	弥生～
2 中山遺跡	譲早市福田町中山	丘陵	黒曜石剣片	
3 正津遺跡	譲早市小豆崎町正津	丘陵	サスカイト片、上器片	
4 西里遺跡	譲早市西里町	丘陵	縄文土器、弥生土器等	周文～ 云作
5 長山貝塚	譲早市長田町	台地	弥生土器	弥 生
6 神城跡	譲早市仲神町	旧水庭中麓高地	軒丸瓦、七管（瓦質）等	中 世
7 謙早農業高校遺跡	譲早市船越町	平野	細砂刷削	弥 生
8 小東A遺跡	譲早市小川町林ノ辻	丘陵斜面上	弥生土器片多数	弥生中期～
9 小東C遺跡	譲早市小川町	丘陵東面	輪式石棺、埴輪	弥生中期～
10 十仙平遺跡	譲早市鶴崎町毫ノ山	丘陵上	黒曜石剣片、碎片	
11 濱内谷遺跡	譲早市小川町	丘陵新部	黒曜石剣片、碎片、他多量	
12 喜延遺跡	譲早市長野町	丘陵	弥生土器、黒曜石剣片・碎片、他多量	弥生中期 初 頃～
13 尾野大久保遺跡	譲早市長野町	丘陵斜面	黒曜石剣片・碎片	
14 喜延遺跡	譲早市長野町1360附近	丘陵斜面		
15 宮崎館遺跡	譲早市宗方町宮崎館 小野小学校裏	丘陵先端	ナイフ（1片）、石器多数、サスカイト、高麗 石フレーク多數、各時期の土器片多數	周文～ 垂 直
16 小野家跡	譲早市小野町	丘陵		寒町後期
17 水の手遺跡	譲早市宗方町水の手	丘陵		
18 太郎丸遺跡	譲早市宗方町太郎丸	平野	弥生上器	弥生中期～
19 小野貝塚	譲早市小野町小野堀	丘陵先端部	弥生土器片 貝の種類はウミニナ、ハイダイ（上体）	弥 生
20 内野遺跡	譲早市小野町内野堀	丘陵先端部	弥生土器片（中期）、劍片、石棒	弥生中期～
21 黒崎城跡	譲早市黒崎町	丘陵先端部		中 世
22 仁田野A遺跡	譲早市黒崎町仁田野	丘陵斜坡地	石鏡、縄文土器片、挿入石器品	縄 文
23 宗方城跡	譲早市宗方町柳原	丘陵		中 世
24 木秀古墳	譲早市長野町木秀	丘陵先端部		古墳後期
25 鶴田城跡	譲早市鶴田町	丘陵		中 世

III 調査の概要

1. 調査の経過

調査は、水田部を対照としたため、水稻の刈り取り後実施することとした。以下、日誌とともにその概要を述べる。

・12月8日

調査開始。丸木舟埋没地点にトレーニングを設定。舳先と艤の関係は不明である。表土より徐々に掘り下げるとしている。丸木舟の舟底は水田面より約40cmほど、排水路肩より約1mほど下っている。掘り下げるに従い、かなりの程度で土層が擾乱されていることが判明。測量用のレベルを地下水監視体制設置に伴う水準点No17より移動。

・12月9日～12日

丸木舟の艤を確認するためのトレーニング（T-1）を設定するが、艤部分は即ち切り取られていることが判明。戦時中、軍関係の建物が建てられた事を聞くに及び、上層の擾乱がかなり下位まで及んでいることが首肯される。T-4、T-5を設定。表土より順次剥離。

・12月13日～15日

丸木舟の図面取り（S-1/10）及び写撮。T-4、5土層写撮。調査区の平板測量。島原鉄道北側にT-6設定。従前のトレーニングと異なり、青灰色粘土層中より種子類の植物遺存体が出土。

・12月16日～17日

丸木舟の取り上げを行い、諫早市郷土館へ搬入し水漬けを行う。T-4、5の埋め戻し、丸木舟取り上げ後、路肩の復旧を実施しつつ、T-2、3の埋め戻しを行う。字「釘の元」で排水路改修及び歩道新設工事箇所があり、観察の結果、現表土下約50cm位に旧耕土面と認証される土層があり、条里の中心部であろうことを彷彿させる。

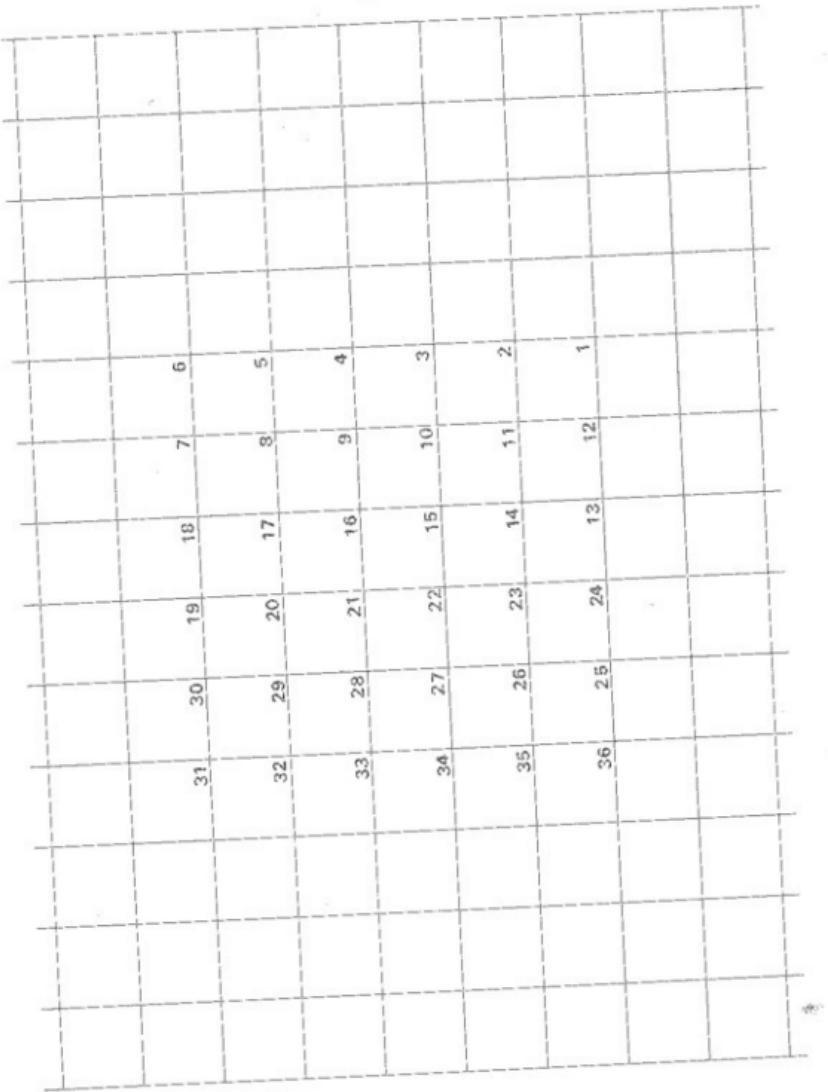
・12月20日～23日

T-6地表下約60cm位で灰茶色粘土層中より小ブロックで微砂を検出。このブロックから植物遺存体が検出される。粘性が強いため厚さ数cmずつ剥離する。土層下位になるに従い徐々に青味が強い青灰色粘土層へと移行する。字「阿弥陀免」にT-7を設定し、条里の界線の確認を目指すが、当トレーニングも旧軍等によりかなり擾乱を受けていることが銃弾等の出土によって知られる。

・12月24日～25日

T-6において植物遺存体が青灰色粘土層下において多く認められるようになる。これは往時の汀線上に堆積したものであることが、木片等のローリングによって知られる。標高10～20cm

図3 桑葉の葉輪



第4图 朝董地区字图



を測る。T-7では青灰色粘土層を調査。貝や植物が堆積したブロックを処々に見、これが灰黒色粘土層に含まれることが了知される。往時の海岸線（汀線）と推察され、標高で約1.1mを測る。往時の汀線がかなり高位にあったことが判明。

・1月6日～19日

T-6・7の調査継続。T-7の北側にT-8を設定。このトレンチも後世の擾乱が著しく、西壁に接してゴミ穴が検出され、銃剣片や薬きょう片等が出土。青灰色粘土層に至り、北壁に接して柄様の加工品（第8図1）を検出。検出レベルは標高132cmほどである。また自然貝層直上において鳥骨片を確認（図版4）。

・1月20日～24日

1月20日、久村氏参加。T-8においては青灰色粘土層中において用途不明の加工品が出土。T-9・10を設定し、表土剥ぎを行う。T-9において灰茶色粘土層上面において杭4本を検出。その後、杭に絡むように枝を横置したしがらみ様の遺構を確認。主軸が若干ズレ込んでおり畦畔の可能性は薄い。T-10は芦の根が深く入り込んでおり、調査に困難を極めるも地表下約50cmでチャンチンモドキの核1個をはじめ、植物遺存体を検出。

・1月25日～2月7日

1月15日、山木愛三氏参加。旧汀線下の貝類と現生種の比較・同定を依頼し、サンプルの採取をT-8において行う。T-9灰茶色粘土層よりチャンチンモドキの核を検出。しがらみ様遺構よりレベル的に下位に木片類が出土する。T-10においてサクラの枝の先端を面取りした加工品出土。標高で178cm前後である。その後、同トレンチの土層図の実測及び写撮、平板測量を実施し、本年度の調査を終了する。

2. 調査の状況

本調査は、トレンチを主体に調査を実施し、本年度10か所を調査した。トレンチの設定に際しては、想定される条里の界線に重なるように設定をし、水路、畦畔等の検出に資するよう配慮した。調査はガタと呼ばれる粘土層の発達が良く、その進歩度は遅々たるものであった。

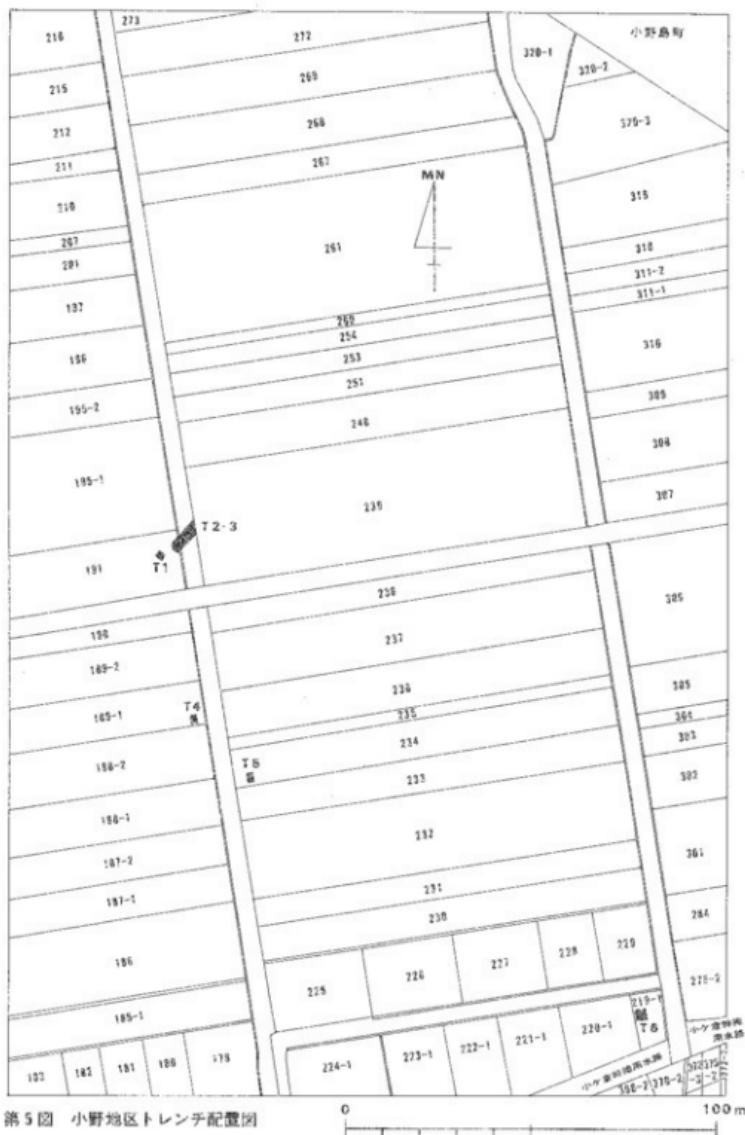
以下、トレンチの概要を説明する。

・T-1

小野町191番地、字「横田」に設定。丸木舟の埋没地点西南位に設定したものであるが、戦中の施設建設に伴い、かなり擾乱されていた。層中からはセメント片等が出土している。また、丸木舟は当トレンチまでは延びていない。

・T-2・3

小野町191番地及び239番地の字「横田」、「西土井下」に設定。丸木舟の埋没層位の確認及び取り上げのために設定。土層の状態はT-1同様劣悪であり、丸木舟側舷より現代の瓦や中世期の土器小片が出上している。丸木舟の埋没レベルは舟底で標高40cm前後を測る。長軸はN



第5図 小野地区トレンチ配置図

0



-47-Wで、ほぼ水位に埋没していた。

* T-4 * 25

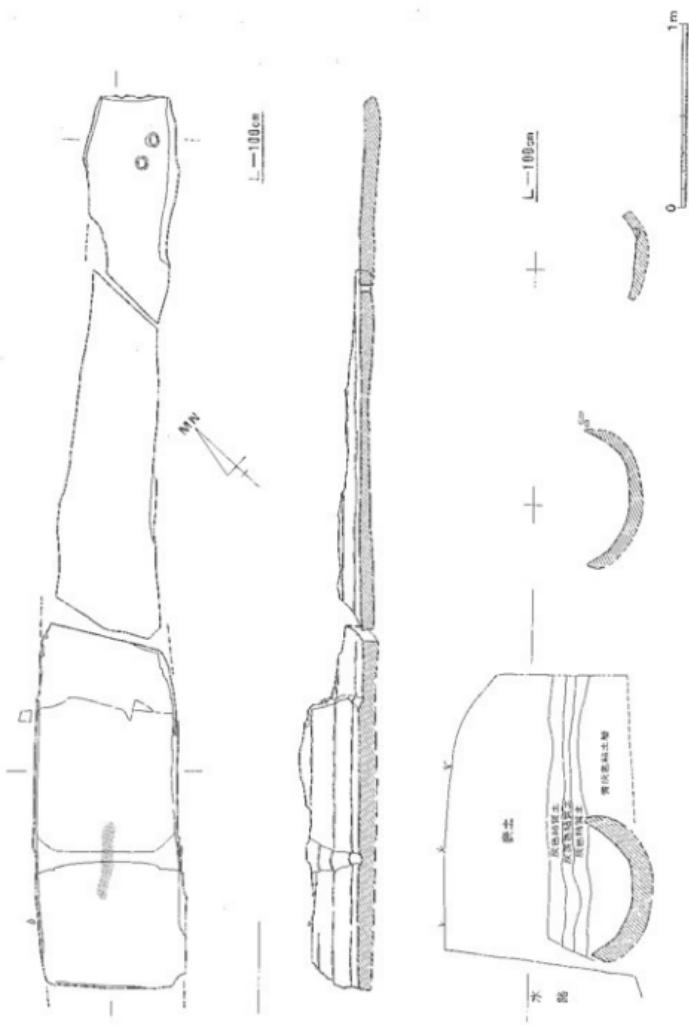
条里的東限を明らかにするため小野町189—1番地、234番地の字「横田」、「中新替」に設定する。表土・床土の下は青灰色粘土層で、下位に行くに従て青味を増していく。当層が後世の人の手が加わったものとは判断されず、条里域内としても、現表土か或いはより高位に施行されたと見る外はない。

• T = 5

条里的東南限確認のため小野町219-1番地, 字「中新替」に設定。既述のトレンチと異なり灰茶色粘土層が介在する。本層は、鉄分粒子を含み、下位に処々に木片を少量包含する。本層の下には青灰色粘土層が存在し、この層の下に植物遺存体を含む自然貝層が存在する。未掘部分にも数枚の自然貝層が存在する。



新潟県上越市レンタル配膳団



第7回 丸木舟裏測圖

・T-7・8

川内町2574番地、字「阿弥陀免」に設定。灰茶色粘土層の発達が良く、鉄分の集積を認める。この層には人の手がかなり加わっていると思われるが、本層からの加工木器等遺物・遺構の存在は現在迄のところ見られない。T-8もほぼ同様の層順を示す。灰茶色粘土層の下の青灰色粘土層中において加工された木片の出土があるが所属する時期が不明である。この層の下に自然貝層が認められ、往時の汀線であったことを窺わせる。尚、自然貝層下にも数枚の貝層が認められるため、現生種との比較、同定のためのサンプルを探取し、後章においてその考察を掲載している。

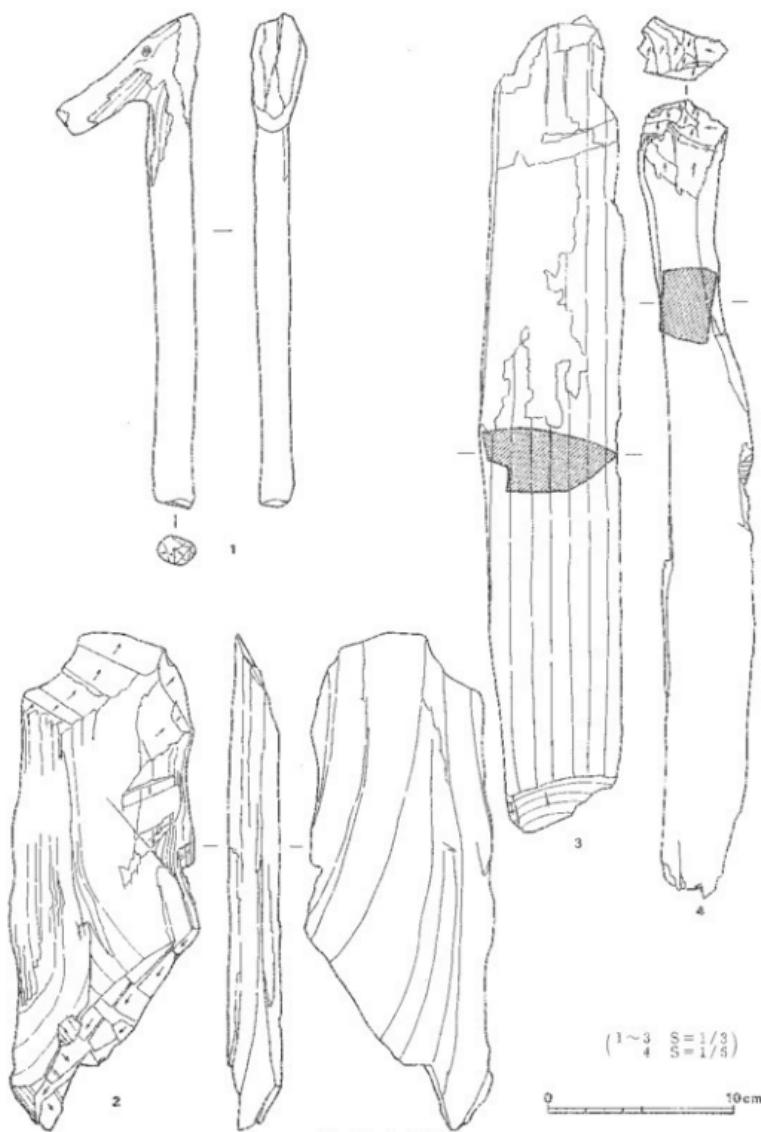
・T-9・10

川内町2607番地、字「伊勢免」及び同2642番地、字「八ヶ坪」に設定。T-9ほぼ中央において「しがらみ様遺構」(付図、図版3)を灰茶色粘土層中において検出。遺構は4本の杭(長さ約40~150cm)を打ち込み、杭間に小枝を絡ませるように横位に組んでいる。杭の中には頭部が潰れているものも見られ、また層位の検討からも近々の所産とは思われない。遺構上面での標高約200cmほどである。長軸はやや振っており、条里の界線等とは考え難い。T-10は単純な層位を示す。青灰色粘土層は他のトレンチより黒味を強くし、層中より杭及び桜の枝の加工品が横位で出土。

3. 出土遺物 (第7・8図、図版2・4)

今回調査したトレンチからの出土遺物は、土器等が皆無に等しく、その殆んどは種子等を含む植物遺存体と若干の動物遺存体である。よって、各トレンチから出土した植物遺体の所属時期は不明と言わざるを得ない。

第7図は丸木舟の出土状況である。主軸N-47-Wである。舳先、艤共に欠失。現存長4.9m、幅83cm、深さ35cm程度を測る。舟底の厚さは約10cmほどで側舷に近づくに従いその厚さを減じており、先尖りとなっている。舳先附近は、面取りが征目となるため外方からの營力により立ち上がり部分より欠損している。舟の中央付近には骨材をはめ込むためであろうか幅10cmほどの抉り込みと、舳先に向って僅かに段を有しながら薄く仕上げた痕跡が認められる。材質は不明。第8図1は柄のような形状を示す木製品である。端部は面取りが施される。2は不整形の板状を示す。上、下に加工痕が多数認められ、特に下位のものは刃こぼれがスタンプされて残る。他面は荒割りのままであり、加工痕は認められない。T-8青灰色粘土層出土。3はT-9、しがらみ様遺構に打ち込まれていた杭である。丸太を荒割りし、先端部を片面から鋭利に、面取りしている。4は約86cmを測る杭で、頭部と中位に加工痕を認める。形状はやや湾曲し、厚さはほぼ均一である。T-10青灰色粘土層中に横位で検出された。



第8図 出土遺物

IV 長崎県・諫早・宮崎館遺跡等の貝類から見た考察

山本愛三

1. 序

昭和61年12月8日から昭和62年3月6日の間、本遺跡の発掘調査が行なわれた。その折の資料の分析の依頼を受けた。この機会を与えて下さった、長崎県諫早市教育委員会、秀島貞康氏を始め、関係諸氏に深甚の謝意を表するものである。

2. 本遺跡の概況

本遺跡は第9図に示すように、長崎県諫早市小野町に位置し、第10図に示すように旧諫早干拓地にあり、条里調査の目的で発掘が行なわれた。本資料を得たトレンチは、第11図に示すように、宇名阿弥陀免からのものである。

4層からなる自然貝層が発見された。貝類組成は第2表に示す通りであるが、いずれも内湾性潮間帶の泥底に生息する貝であり、当時の汀線帯を示すものと考えられる。

3. 本貝層の意義

ウルムラ氷期（約20000年前B.P.）には海面は-142mまで海退期を迎える。その後約6000年前B.P.には温暖期を迎え+6mまで海面は上昇した。いわゆる縄文前期大海進説、東木（1926）、酒詰（1942）、杉村・成瀬（1955）、渡



第9図 諫早・宮崎館遺跡等位置図



第10図 諫早・宮崎館遺跡等周辺図

辺(1963), 成瀬(1965)等があるが, 一方, 和島(1964), 吉川, 满塩(1965)等は, 熊本県長州の第四紀の調査で, 玉名地方の繩文海進のピークは, 繩文後期である可能性が最も大きいとしている。しかしながらかは問題をのこしている。坂口(1963)は高潮期を迎えるのは B.P. 4000~2000年とし, 汀線の最も後退する時期と, 海面が最も高くなる時期は必ずしも一致しない。裏日本と表日本とでは海平面の上昇は異なると指摘している。

一方, 潟水汀線の調査の結果から, 旧汀線附近遺物の多いのは, 繩文中期末(約2500年B.C.)~後期初頭であるとする, 堀江(1957)など北海道を中心とした報告もある。又, 住米の海水準の研究は, 地殻変動の差を考慮していないとして, 地殻変動を考慮した考察を行い, 先史・歴史時代の地殻変動は海進と比較する時無視できるオオゲーであるとしている。杉村・成瀬(1954), 井関(1968)等があるが, これとても, 関東地方を中心としたもので,



第11図 発掘位置図

第2表 貝類統成表

種 名	第1層		第2層		第3層		第4層	
	数	%	数	%	数	%	数	%
1 <i>Fusitricingula nipponica</i> カワヅナツボ	19	2.0	3	0.6	2	1.9		
2 <i>Corbiculideopsis dianchiensis</i> カワアイガイ	668	75.5	453	83.4	66	62.8	279	93.0
3 <i>Euspira pagana</i> イササギレイシシラマガイ	8	0.5	8	1.5	26	24.7	1	0.5
4 <i>Eunatina papilla</i> ネコガイ	11	1.2						
5 <i>Reticularia spirae</i> ヒメムシロガイ	11	1.2	6	1.1			5	1.7
6 <i>Gyreneula perplex</i> ネジガイ	1	0.1						
7 <i>Encharilda sinensis</i> タクミニナ	50	5.5	4	0.7	2	1.9		
8 <i>Atricincta exilis</i> タツコメツブ	92	10.2	7	1.3	5	4.8		
9 <i>Tegillarca bisenensis</i> ハイガイ	8	0.9	1	0.2	3	2.9	1	0.3
10 <i>Crassostrea gigas</i> マガキ	2	0.2	16	2.9				
11 <i>Lanistocardium undatipileum</i> マダラチゴトリガイ	1	0.1						
12 <i>Theora tabularis</i> シズクガイ	6	0.7	3	0.6			13	4.4
13 <i>Moerella iridescentis</i> テリザクラ	9	1.0	38	7.0	1	1.0	1	0.3
14 <i>Sinonovacula constricta</i> アグマキガイ			4	0.7				
計	906	100	543	100	105	100	300	100

不変的なものではない。非常に大きな見方をすると、海進のピークを縄文前期とする論文は、関東に多く、縄文後期であるとする論文は、北海道、九州に多い、長崎県において縄文前期の遺跡は少なく、発見されても、五島・江戸貝塚や野母崎町菖蒲川遺跡のように、満潮時には海底に没してしまう地点から発見される、このことは縄文前期の海水準は、現在より低い所にあったことを暗示し、海進のピークは縄文前期よりあとであることを意味していると考えられるが、平野地の少い、長崎県では、データー不足であり、多くの調査資料を正確に積み上げていく必要がある。かかる意味で今回の調査の意義は大きい。

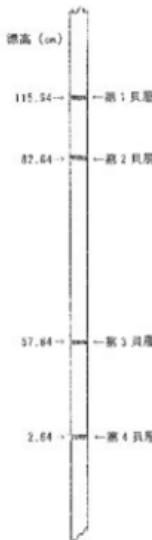
4. 貝層形成年代の推定

今回発見された、自然貝層は第3図に示す地点で発見され、その柱状図は第12図に示す通りである。土質は表層をのぞき有明粘土層・鎌田(1979)である。標高は2.64~115.64cmと現海面より高いところから海進時に形成されたものと考えられ、遠藤(1967)の公式より算出すると、以下のような、しかし遠藤は海進のピークを

- 第1層……6785 B. P. (4785 B. P.)
- 第2層……6825 B. P. (4825 B. P.)
- 第3層……6975 B. P. (4975 B. P.)
- 第4層……7017 B. P. (5017 B. P.)

6000年B. P. としているので、これより2000年はずれるとして概算したものが()である。

以上は、カーボン測定を完了していないので、あくまで、推定の域を超えるものではない。いずれにせよ、本調査は長崎県における、海進海退の証拠としての意味は大きいものと考えられる。



第12図 発掘柱状図

参考文献

- 遠藤 邦雄(1957)：日本沿岸の過去2万年間の海水位変化、考古ジャーナル6, 6—9
- 堀江 正治(1957)：気候変化と湖水の汀線、第四紀研究, 27, (9), 463
- 井関弘太郎(1968)：時代を異にする汀線高度の比較による地殻変動の考察、第四紀研究, 7, (4), 171—131
- 鎌田 奏彦(1979)：有明海の地形・地質、沿岸海洋研究ノート17, (1), 72—85
- 成瀬 洋(1965)：海水準変化の諸問題、第四紀研究, 4, (2), 83—94
- 坂口 豊(1963)：日本の後水期海面変動に対する疑問、第四紀研究, 2, (6), 211—219
- 酒詫 伸男(1942)：南関東石器時代貝塚の貝類相と土器形成との関連について、人類学, 57
- Sugimura, A. & Naruse, Y. (1954, 1955) : Changes in sea level, seismic upheavals and coastal terraces in the southern Kantō region, Japan (I) (II) Jap. J. Geogr. 24, 101—113 : 25, 165—176

- 東木 充七 (1926) : 地形と海綿分布より見たる関東低地の旧海岸線, 地理学, 2, 579-778
和島 誠一, 麻生 俊 (1964) : 北九州における後水期の海進海退について, 資原研究所集報, (63), 64-73
渡辺 直継 (1963) : 日本先史時代に関するC¹⁴年代資料, 第四紀研究, 2, 232-240
吉川 博恭, 溝塩 博美 (1965) : 熊本長州町付近の第四系, 九大理学部研究報告, 6, (2), 83-98

V ま と め

以上、本年度の調査概要を記したが、本章で若干のまとめを行い、本年度の総括としたい。調査は、条里遺構の存否・限界及び成立年代の推定、更には干陸地を耕地化した上限期の推定を目的として実施した。

調査区設定の基本としたのは、当該地で古道と推定される字「四ノ坪」、「釣ノ浜」の西側小径を南北の軸として想定し、方一町の区割を設定(第3・4図)して、溝・畦畔等が重複すると考えられる地点にトレントを設定した。この軸はN-3°-Wである。本年度のトレント設定については、以上の観点から設定したのであるが、条里施行推定地の東限、北限と推される部分であり、その限界を明らかにするような遺構を検出することはできなかった。特に、T-1~5を含む地区においては、他のトレントに見られた灰茶色粘土層が確認されず、一時期沼泥地化していた可能性が高い。特に丸木舟の埋没地点はこの区域内に含まれており、唐比塔ノ本遺跡出土例¹¹と同様湿地で利用されたものであろう。

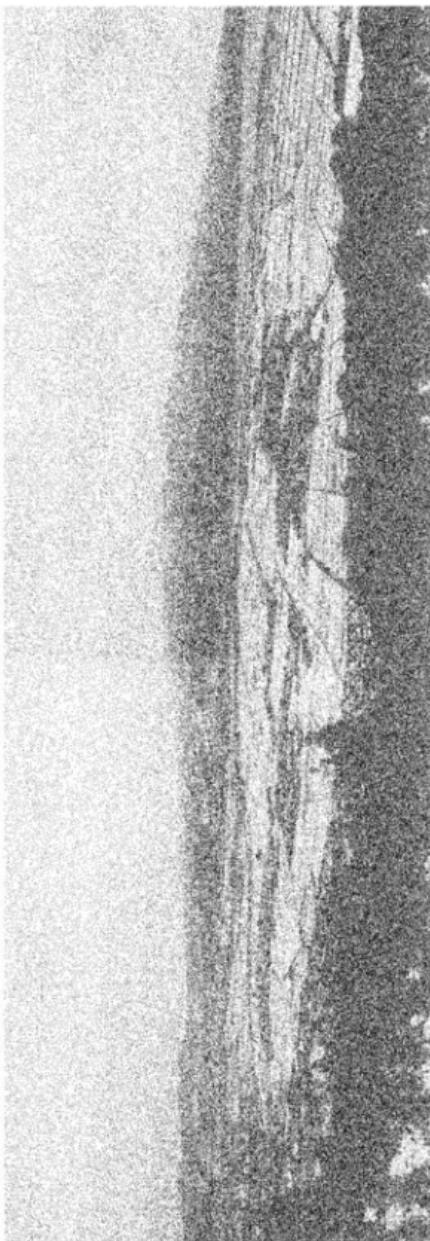
また、前述の灰茶色粘土層は、鉄分等の粒子を含む粘性の強い層で、層厚は40cmほどである。かなりの程度人為を受けた土層と推されるが、明確な床土等は現在迄のところ確認していない。ただ、T-9において同層中で「しがらみ様遺構」が検出され、当遺構と同時期、或いは遅る可能性を提示している。この下位に青灰色粘土層があり、木の加工品等を含んでいるが、所属時期は不詳である。

今次の調査においては、遺構、土層をはじめ不明な部分が多く、その多くを詳らかにすることができなかった。これらについては、第二年次目以降の調査において少しでも明らかにし、小野平野の成り立ち、これに係る人間行動の軌跡を僅かなりとも闡明化したいと考えている。

註

1. 土肥利男 「多良山麓研究」 昭和40年
2. 註1と同じ
3. 長崎県史編集委員会 「長崎県史——古代・中世編——」 昭和55年
4. 福田三千氏が多年に亘って表面採集され、現在、小野小学校及び諫早市郷土館に展示保管している。
高野晋司 「小野古墳」 諫早市文化財調査報告書第2集 昭和53年
5. 助島貞彦 「林ノ辻遺跡」 諫早市文化財調査報告書第4集 昭和58年
6. 和島誠一・麻生俊・田中義昭 「北九州における後水期の海進海退について」
『資源科学研究所彙報』63 昭和42年
7. 藤田和裕 「唐比塔ノ本遺跡」 『長崎県文化財調査報告書』第50集 昭和56年

図版



小野山野の全景（金比羅山より北を望む）



T—2+3
丸木舟撿出状況



同上
丸木舟撿出状況



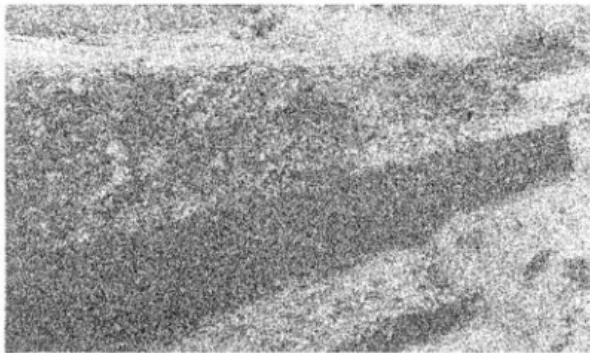
同上
丸木舟埋没土層状況



T-9
しがらみ根遺構
(西より)

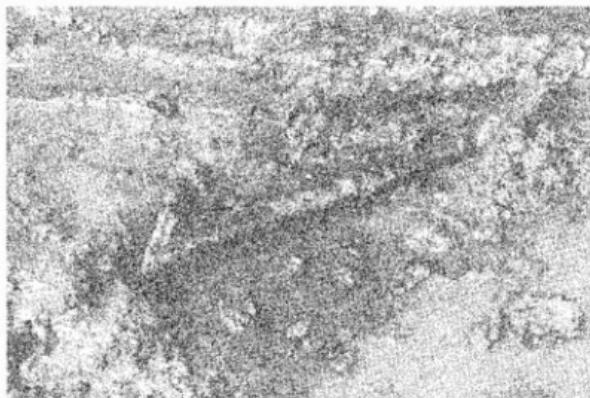


同上
(東より)



T-9
土層堆積状況
(西型)

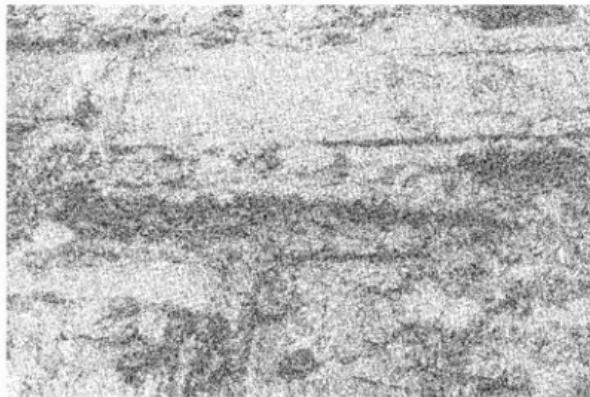
图版 4



T—8 遗物出土状况

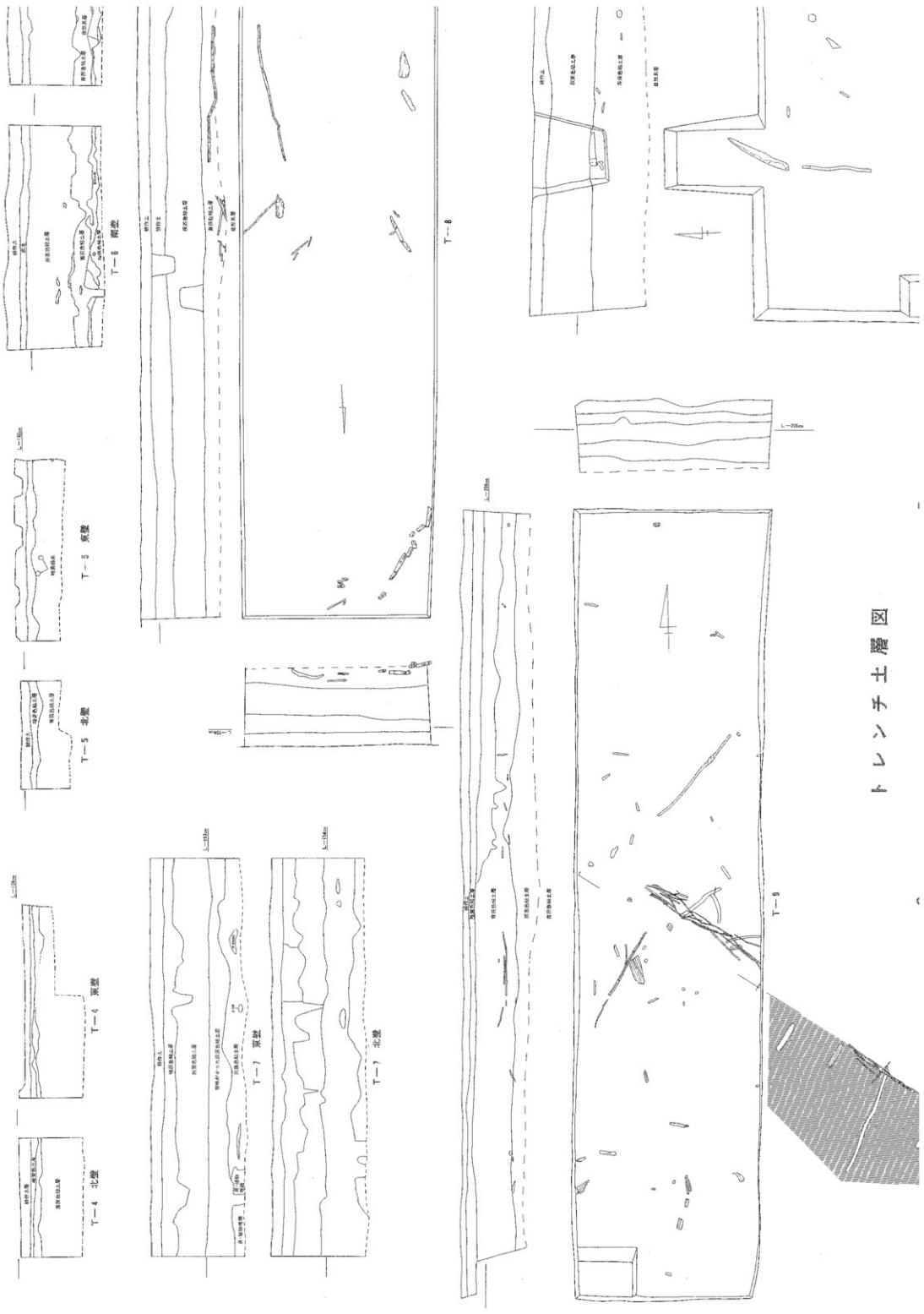


T—8 鸟骨出土状况

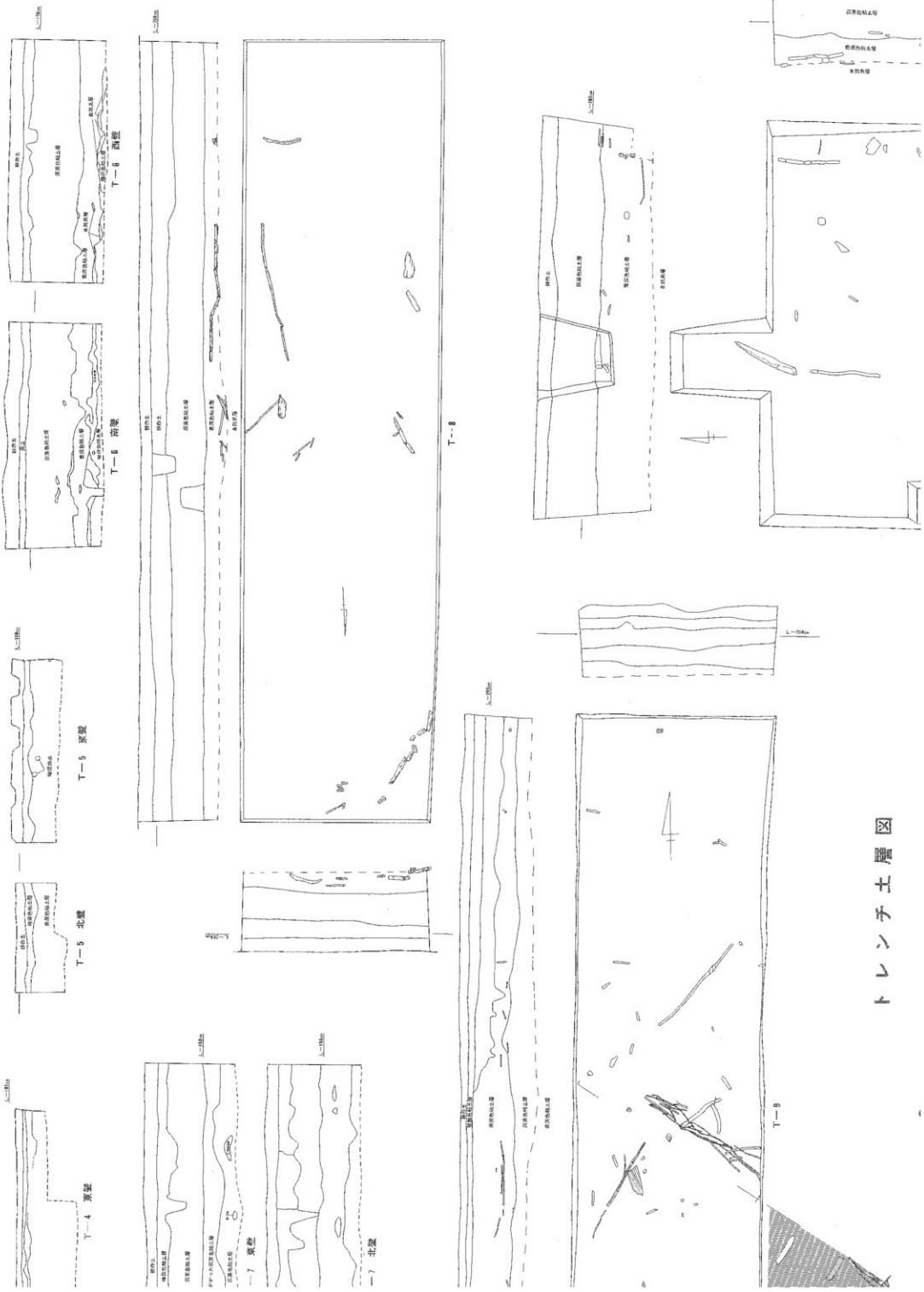


T—9 遗物出土状况

トレンチ土層図



トレンチ土層図



諫早市文化財調査報告書第7集

宮崎館遺跡等範囲確認調査概報

昭和62年3月31日

文化振興課

発行所 講早市教育委員会

諫早市東小路町1番地

印刷所 真光社印刷

諫早市八天町

